

8
227

寫真畫入
月瀨案内

025543-000-1

8-227

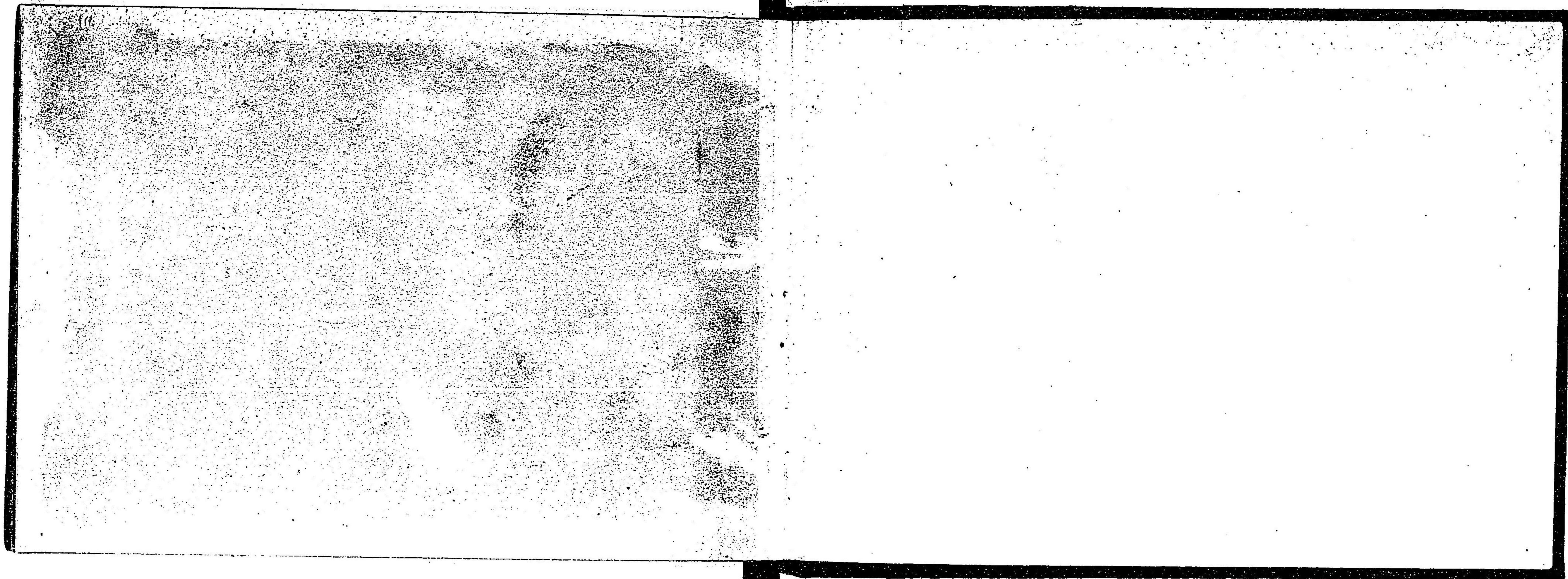
月瀨案内

木津 亀郎 / 著

M33

ADC-3031





●開業御披露

御旅館

御料理

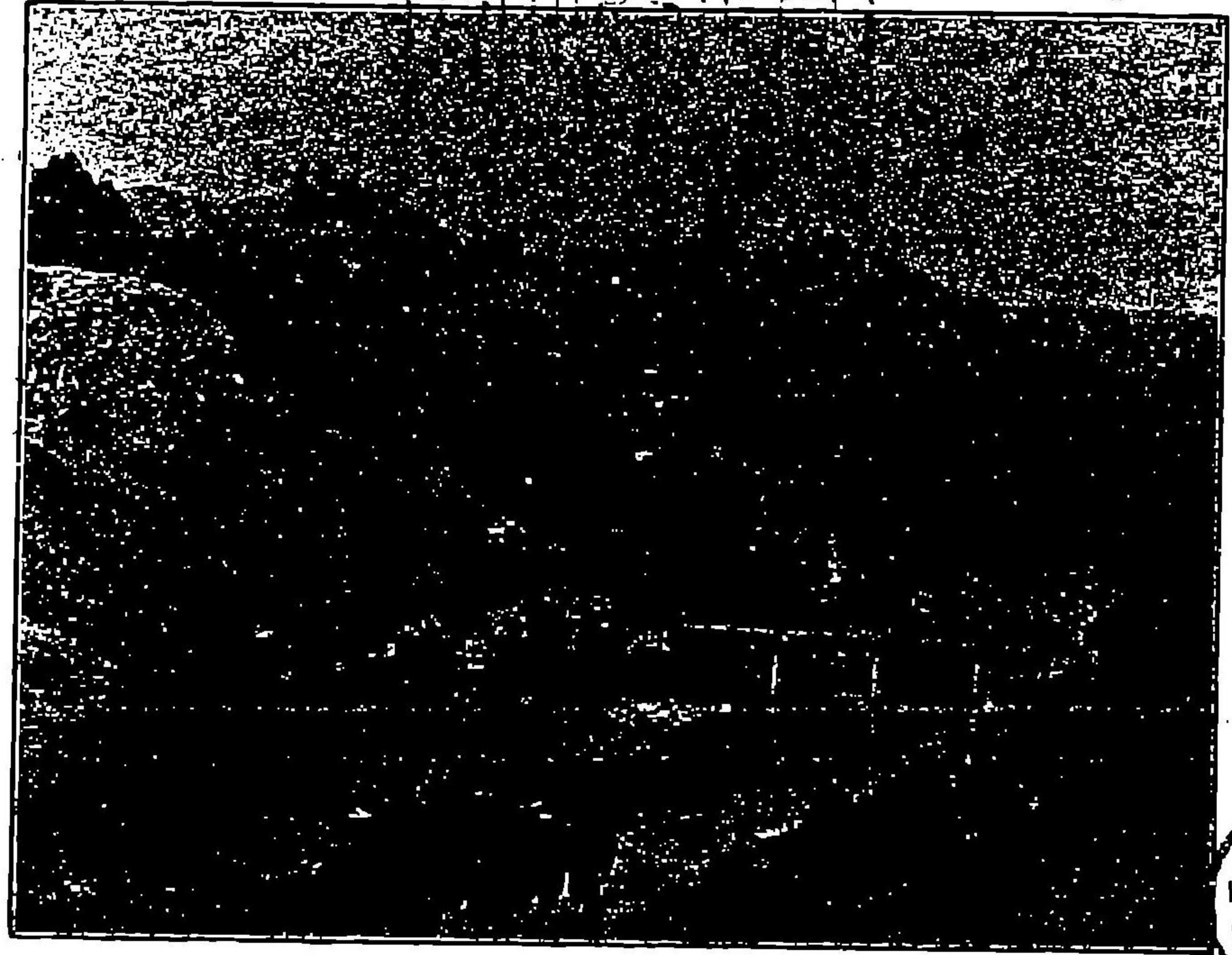
各位愈々御清福奉賀候緒弊館料理
業開業以來未々數月ヲラサレニ日
増ニ隆盛ニ趣キ候段奉鳴謝候テ
料理專業ニテ御不自由ノ儀モ
有之候ニ付御便利ノ謀リ御旅館ヲ
兼業仕候間何卒御愛顧奉祈候

伊賀上野中町

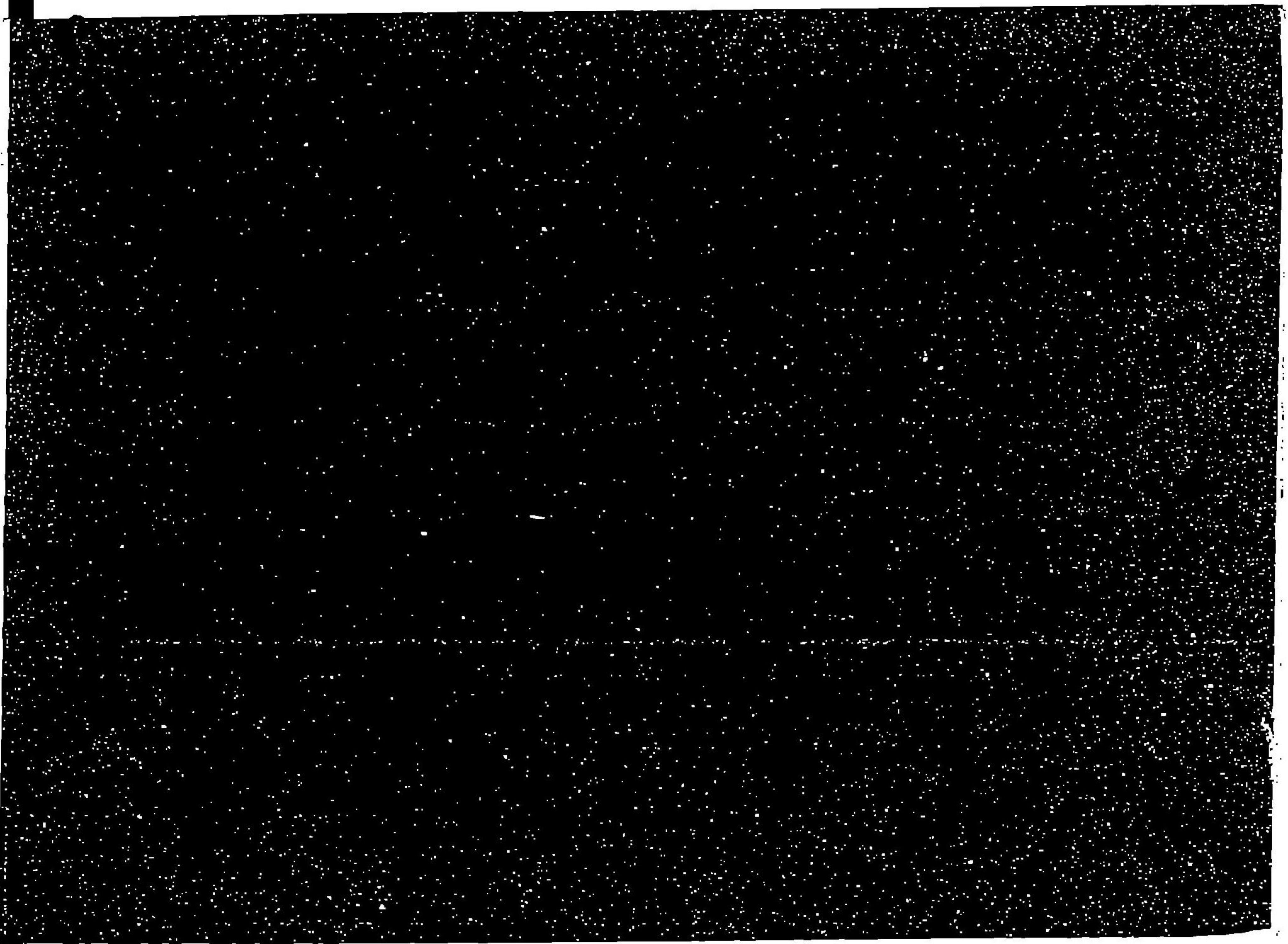
花月

8-227

湖全景



湖全景



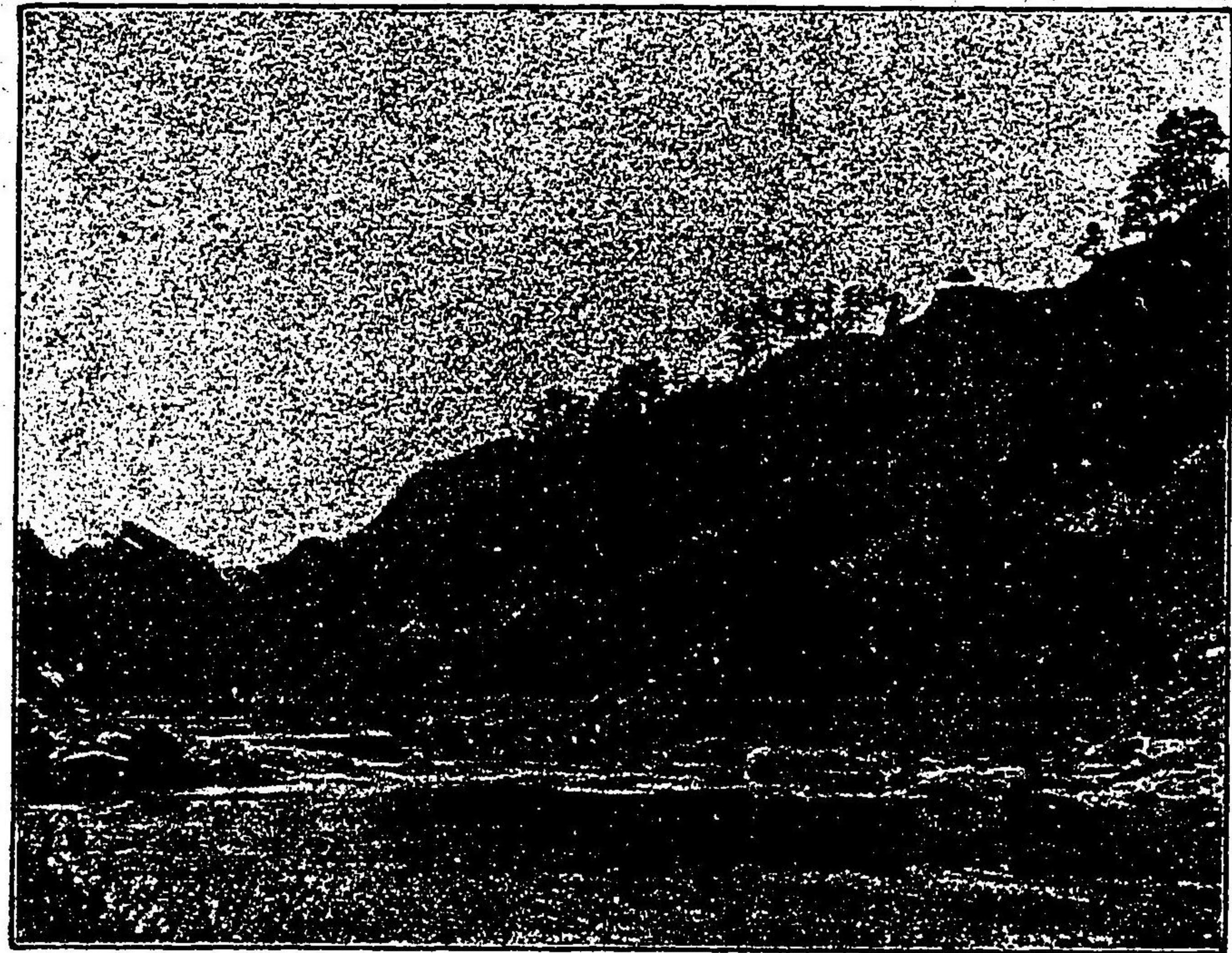
奥ノ谷



麓ノ谷



— 1922年11月15日 —



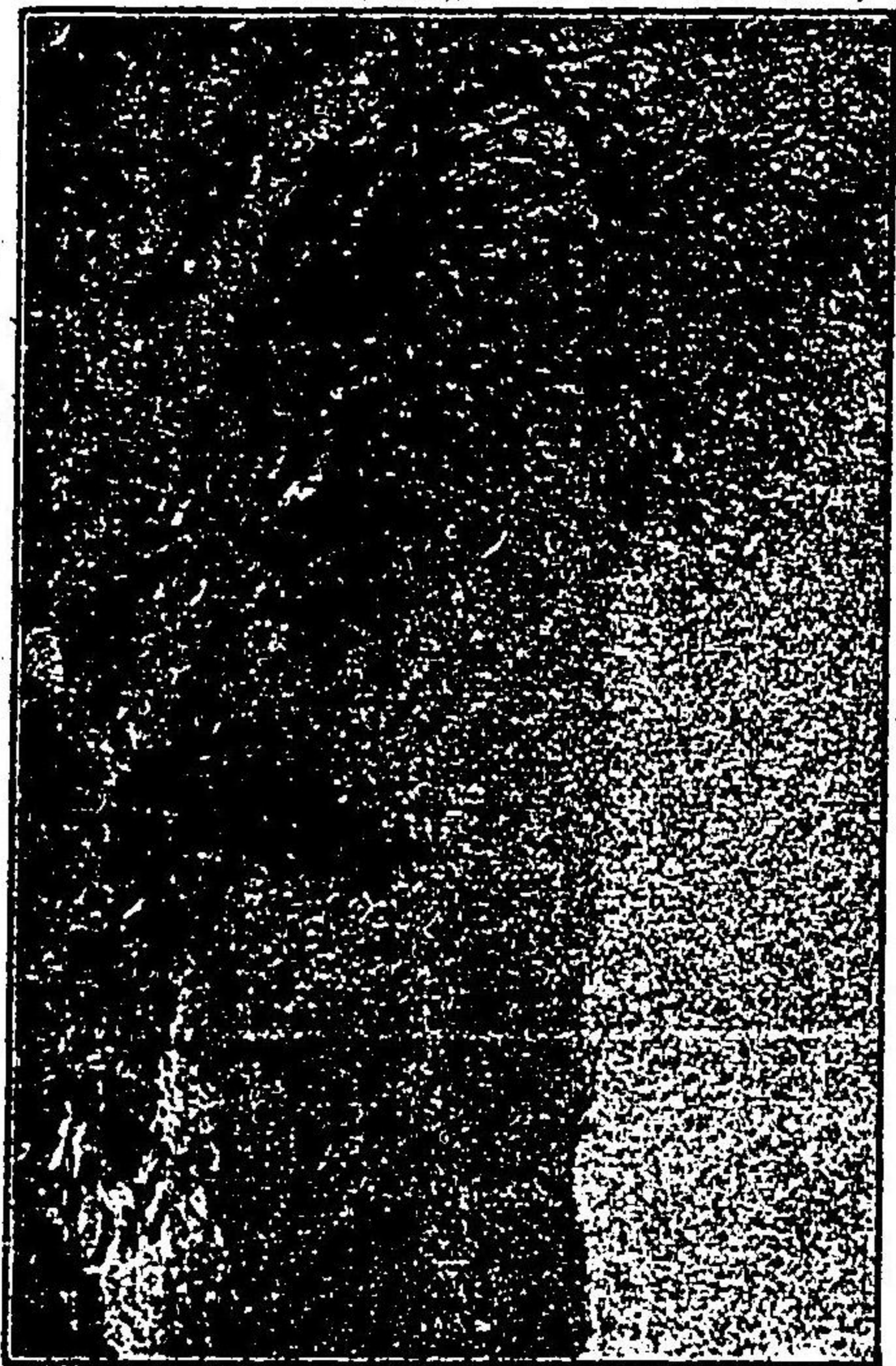
一六
上
山
景
全
尾

尾山全景

一月廿五日 谷本 湖ヲ望ム



老 間 ノ 湖



谷本湖の風景

香國指



鐵

歲在己亥

清明節

一寄題



月瀨案內序

天保庚寅春齋藤拙堂遊月瀨以爲天下絕勝讚賞不已文以紀詩以賦殆無餘蘊卽錄其詩十律以代序

著者識

梅溪勝趣好親論 今日扁舟始問源 濕霧兩崖春水渡 冷雲十里夕陽村 楊前幾歲按圖畫 枕上平生勞夢魂 記去山頭老禪宅 直從香裡得紫門

清川幽麓阻紅塵 雞犬寥寥洞裡春 僻境衣市非魏晉 編民姓族定朱陳 山田万石玉爲食 籬落十村芳是鄰 笑殺凡桃李 僂骨種花不學避秦人

花中清絕久推梅 此境居然更占魁 遍地鎔銀爛如海 滿山種玉紫成堆 澄溪蘸影參差見 曲徑吹香窈窕來 東閣西湖何足道 唐賢容易鉄心摧

山展行窮層嶺西 梅花深處路高低 雲中人過誤前渡 雪裏鶴歸迷舊棲 幽谷風香自爲導 芳陰苔駁亦成蹊 清宵更發通仙秘 疎影分明月一溪 月下振衣立碧岑 皎然一矚盡千林 幽巖冷淡雲

無色 遙澗潺湲花有音 風拂帽簷從酒醒 參橫頭
 上覺宵深 佳人畢竟能留客 今夜要須宿樹陰
 雪梅相伴占茲辰 芳意寒光兩是真 自有暗香千
 樹曉 更添素彩十分春 豈圖瘦嶺夢僊客 兼作剡
 谿乘輿人 滿目皚然清淨境 無山無水著纖塵
 踏壑攀巖不自由 万梅林下蕩輕舟 綴珠枝在風
 塵表 映雪人披鶴氅裘 素綯圖成桂危壁 玉山影
 倒落中流 篙夫移棹須徐緩 九曲風光要細求
 盡日尋春奇欲窮 溪山隨境更無同 巖懸危岸參
 差出 水啣寒沙屈曲通 踏破軟雲薰屐齒 穿來叢
 雪揭舟篷 兜羅綿裡乾坤白 埋却斜陽亦失紅
 踏春布韉爲旆忙 看自朝陽到夕陽 宜雪宜月
 嚼 嚼 有花有人任徜徉 新圖寫景筆端活 奇句記
 游囊底香 一去他年憶茲勝 山川杳在白雲鄉
 留連兩日宿僊寰 僮僕催歸強出關 滿袖清香携
 得在 一枝冰蕊折將還 重遊不識在何歲 後夢只
 應尋此間 好借蹇驢倒騎去 雲間引領望殘山

月 瀨 案 內

木津碩堂 著

昨日までは淋しきもの一つは數へられし松の嵐も何時し
 か和りき呼と積みし峰の白雪も消えはて、やく青みわさき
 る庭の芝生に一本立てる梅の笑み出てこづるよあくる月
 影のせかよ打かほみてやく春の氣作てのひたる頃こそ
 まことに樂しきもれよとわれ まして水の色緑は香雲霞か
 なるあたりあやかれたらんよと實に羽化して登仙するの
 思もあるべくこの心地かたらんよも口はきよをよばすま
 るさんよも筆これをつくまことわたはざるべし月の瀨の
 里の名年ことよ世よ高くなりて杖ひく人の加とり行くこと
 故なきにまもあらずやと其境よ入りて未だ其勝をつく
 やすかたをまを見て全景を品する人た少きよめりすこ
 れまこと此里のためよも悲しむべく其人のためよも惜む
 べき業よしあれば まさるがまよ道しるべせんとて筆ど
 りとまめり見ん人その文の拙なきをな笑ひ玉ひぞ

● 鐵道線路の部

遠き處より來んものゝかならず鐵道の便をからん 鐵道の便をからんものこまたかならず 東の名古屋より西へ大阪へ 通せる幹線津より龜山に草津より柘植へ奈良より加茂へ 通せる支線ある關西鐵道を経ざるものゝ少なからん 茲に 此線路とこまに連接せる線路の哩數を示さん 必要なきわだにしもあらざるべき

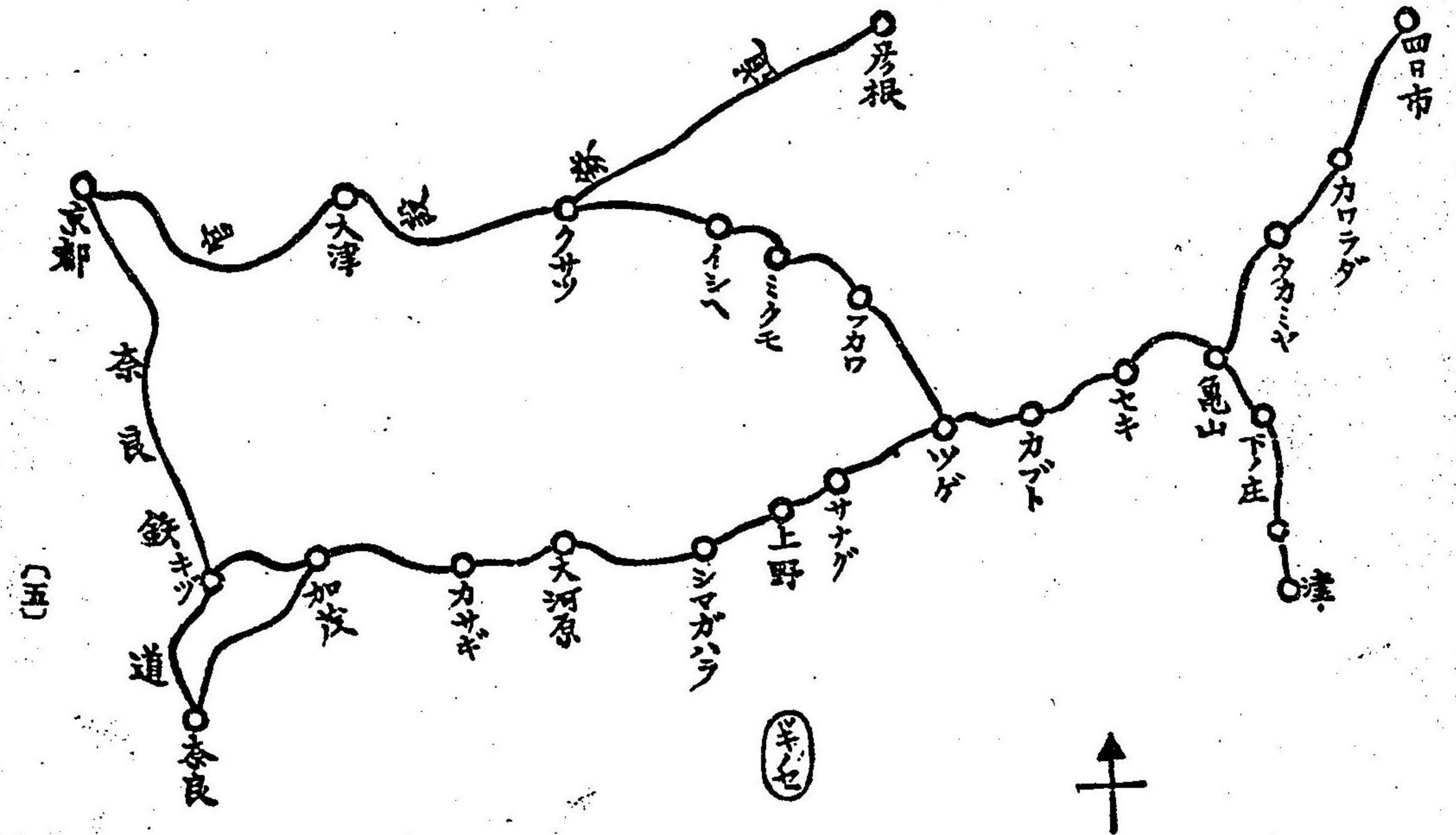
◎ 官設鐵道線

- 新橋 名古屋間 二百二十五哩二十九釐
- 大阪 京都間 二十六哩六十四釐
- 京都 草津間 十六哩四十六釐
- 彦根 草津間 二十四哩四十五釐

◎ 關西鐵道線

- 名古屋 四日市間 二十三哩八釐
- 四日市 龜山間 十四哩十八釐
- 龜山 柘植間 十二哩三十二釐
- 柘植 上野間 九哩八釐
- 上野 島ヶ原間 四哩三十八釐
- 島ヶ原 笠置間 七哩五十七釐

鐵道線路之圖



(五)

(六)

笠置加茂間 四哩十一鎖
 加茂新木津間 三哩六十五鎖
 新木津網島(大阪)間 二十八哩六鎖

◎同支線

津龜山間 九哩六十鎖
 草津柘植間 二十三哩五十五鎖
 加茂大佛(奈良)間 五哩三十五鎖

◎奈良鐵道線

京都木津間 二十哩四十鎖

◎大阪鐵道線

湊町(大阪)奈良間 二十五哩三十六鎖

◎參宮鐵道線

山田津間 二十六哩十五鎖

鐵道線をとなきし後月瀬に到らん道筋の次項を見て知らるべし

◎道筋の部

關西鐵道より月瀬に行かんには上野停車場以東方來る

もれの上野停車場にて下車するを順路なりとす

上野停車場より上野町まで凡二十五六丁 之をより木興大野木白樫石打尾山を経て月瀬に達す その間里程凡三里 十四五丁あり從前の道狭く橋小やかよして人の歩行やへ困難なりしが今の橋を架けかへ路を擴げ車馬の往來自由になりぬ人力車に乗らば二時間以内にて着くべし又頃日工事を起せる伊賀鐵道にして通ひあば上野停車場より月瀬までの内幾何か鐵道の便を得ん

上野停車場以西より來るもれとこの道筋三つあり一つの笠置停車場よりし一つと島ヶ原停車場よりまきは一つの

一島ヶ原停車場より行かんはそこよて下車し島ヶ原白樫石打尾山を経て月瀬に達す里程わずか二里餘をれと道狭くまて人力車の通ひかぬる處あり一笠置停車場より行かんよとそこにて下車し歴史の上の名ぶか笠置山の麓を南へまわるとこより柳生高尾桃香野を経て月瀬に達す里程凡四里その間道狭くして歩行し難きものならず卅丁ばかりの山坂ありて人力車の通行よほど困難なり

上野以西より来るもれの島ヶ原またの笠置の停車場まで下車する方里程れ上に於てやく近き道路險きと車馬の往來不便なると困難あるれみならずこの村々に人力車は備へつけ少なさに花見の旅客の一時に群れよるも皆々その需めは應じかねる場合多ければ時として徒歩する覺悟もなかるべからずされば東よりするも西よりするも上野停車場まで下車すること最も便利なれ

上野停車場に人力車の乗車切符を發賣せし人力車乗りて上野町またの月瀬に至らんものこの切符を求むること宜けれ

●花期の部

月瀬の梅の山谷の間にあるゆゑ花の咲くの總て平地であるもれよりのところか遅るものにて大抵の春の彼岸十日乃至十四五日前を最と見頃となすされと平地の花の一時に開きまた一時は凋むもこの地の花と山の頂にあるものと谷の底にあるものと咲くも凋むも一樣ならず山頂にあるものと少老早ければ今を眞盛りとするも谷の底にあるものと少し遅るれば漸く蕾が破らんとし早き處の眞盛り

ならんとするが如き有様なれば平地のよりはなかく眺めたれしまるゝぞよし

●梅溪勝地此部

桃李言はす下をけづから蹊をなすと古き諺もあきばまして山の幽しき水は清らかある梅が香の薫らまは月瀬の名の世間に隠れなきよ至りまのやもめるべき理あま古にし世にのたゞ伊賀の好事者遊びまのみ未だ詩歌文詞も入らざりま今を遡ること百四五十年前即ち寶曆の頃平安れ人神澤其翹著す所の翁草よこじめてその勝をしるる續いて文政の初め山田の詩人韓聯玉その勝を吟くし吟詠頗る富む文人これよ和し哀然とまて冊をさしぬ名けて月瀬梅花詩帖といひさやれと當時いまだ左程よりもてこやざり

天保元庚寅の春二月十八日碩儒齋藤拙堂「伊賀國柘植村の人」その學友および門生數輩とともよ一たび遊びて無雙の勝地となまため月に月瀬紀勝二卷を物せらまぬこれぞ廣く世間よ知れわたりたる端緒にまて頼山陽篠崎小竹等をはじめ詩を嗜み歌を詠み又と畫をよくするもれとわれ後れと節をこの地よ曳きとれ吟懐を述へその景色を寫し

とよと今れたれ知らぬものさきよ至りき特よ近とる關西鐵道の上野よ停車場を置きしより一層旅客の便利を増し雅俗の別なく男女れ差なく來遊ぶもの陸續とまて踵を接し朝よ來り暮に去り殆ど舊時よ百倍せるれみならず將來また年を逐ふてますます盛ならんとするに至り

◎ 月瀬

月瀬は奈良縣添上郡月瀬村大字月瀬あり東の嵩と接き西と桃香野に連り南と山を負ひ北と水を隔て、長引に面ひ東北の一隅は尾山よ隣れり

山と甚高からざるも連峰黛の如く川と甚深からざるも水清くして扁舟を浮ぶよ足る樹とみな梅にして山となく露となく一面に咲き満てるさま白雲の棚引たらんが如くまた靡かぬ煙を見るにやも似たり 岡本花亭は不是梅花澗溪、溪山却在梅花裏、と吟破せるの最も適切なるを覺ゆ その山水の明媚なる風光の絶佳なる實よ こそ我が帝國は大公園とや謂まそ

著者曾て梅溪ニ遊ビ紀行數篇アリ今其ノ要ヲ摘ミ左ニ其ノ一節ヲ掲グ

遙ニ望ム峰相連リ谿相枕シ水其ノ麓ヲ流レ煙霞模糊ノ裡ニアルモノ之ヲ月瀬トナス往時拙堂其ノ勝ヲ説テ曰ク「何地無梅、何郷無山水、唯和州梅溪、花挾山水而奇、山水得花而麗、爲天下絶勝」ト吾人又茲ニ遊ビテ爾カ云ハムトス五月川ノ清流ナクハ誰カ來リテ梅林ノ勝ヲ探ラン梅林ノ勝ナクハ誰カ又來リテ五月川ノ流ニ嗽ガン五月川ノ清梅林ノ勝相得テ誠ニ天下ノ勝區ナリト谿ニ沿ヒテ又進ム水益々綠ニ花愈々濃ク而シテ風光水色亦愈々益々其ノ勝ヲ加フ時ニ東風暖ヲ送り花瓣翻々トシテ鼻頭ヲ掠メ薰香馥郁トシテ衣袖ヲ襲フ湖水淙々然トテ麓ヲ繞ル響操琴ノ如ク清冽掬スベク冠纓濯フベシ行クコト數丁竟ニ月瀬ニ達ス

月瀬ノ地タル山ヲ負ヒ河ヲ帶ビ梅樹數百千株四方ニ乱發シ岳ヲ埋メ谷ヲ繞リ民家其ノ間ニ三々五々點在シ或ハ見ハレ或ハ隠ル樹ハ皆苔ヲ帶ビ石亦古シ樹下ヲ歩シテ吾ガ意ノ向フ所ニ逍遙ス目ノ觸ル、所樹ナラザルハ莫ク樹ハ皆梅ナラザルハ莫シ山ノ巔モ梅ナリ水ノ濱モ梅ナリ凸ル所凹ム所左右俯仰亦皆梅ナリ五月川ハ碧波漫々トシテ山腰ヲ繞ル月瀬名稱ノ由來果シテ此ノ川ニ

出テタルカ此ノ日天明ニ風和キ都人士女遊ブモノ雲ノ如ク往來繽紛タリ草ヲ披キテ坐スル者アリ瓢ヲ傾ケテ飲ム者アリ飄然トシテ唸スル者アリ婆然トシテ舞フ者アリ樹下ニ踞スル者亭榭ニ息フ者アリ山ニ登ル者ニ谷沿フ者來ル者歸ル者項背相望ム皆掌ヲ拍テ快哉ヲ稱セザルハナク吾モ亦心耳清爽トシテ興味湧クガ如シ唯憾ムラクハ仙洞忽チ俗界ニ化スルヲ將ニ去リテ谿ヲ下リ流ニ棹サムト欲ス偶々鶯吟近ク聞エテ吾ガ詩興ヲ促スニ似タリ是ニ於テ忽チ悟ル吾人徒ニ胸中ノ塵ヲ拂ハンガ爲ニ叨リニ其ノ山水ヲ品シ其ノ梅花ヲ評シ其ノ境ヲ騷ガシ其ノ雅ヲ俗ニシ得々トシテ獨喜ブモ若シ一言ノ以テ相酬ユル所ナクバ此ノ山水ト梅花ニ對シテ無情ナルヲ且ツ古人花ニ對シテ謂ヘルコトアリ花アルモ酒ナクバ風流ナラズ酒アルモ詩ナクバ亦俗遊ナリト吾性酒ヲ嗜マズ既ニ風流ヲ缺ク花神ヲ汚スコト其レ幾何ア若シ詩以テ之ヲ賞スルナクバ其ノ罪更ニ大ナラント直ニ筆ヲ援リ一詩ヲ賦ス

維山維水兩清奇 收入騷人畫與詩
 嶺見梅溪風趣好 雨昏時又月明時

既ニシテ夕陽西ニ傾キ咫尺色ヲ辨セズ還リテ宿ニ投マ月ノ出ヅルヲ待チテ舟ニ上ラントス (以下略之)

◎尾山

尾山ノ同じ村なる大字尾山にあり東と治田に接き西と長引と連り南の河を隔て、嵩と面以北と石打に隣り西南と月瀬橋を以て月瀬に境せりこの地の風光また極めて佳なり人往々口を開けバ月瀬の梅といふをされど尾山の梅のゆかで月瀬と譲るべきこそ月瀬といふと尾山を併せてこれをいふなり尾山の景色尾山よありて眺むるの月瀬より遠く見渡すれ優れるに如かず月瀬の景色月瀬よありて眺むるの尾山より遙に見渡すの優れるよ如かず二竹相對ひて兄たり難く弟たり難き勝地にぞある

左ニ紀行中ノ一節ヲ抄録ス

既ニシテ祝谷ノ上ニ出ヅ祝谷ハ尾山八谷ノ一ナリ煙峰乍チ見ハレ香雲乍チ起ル遠キハ翠巒ノ腰ヲ繞リ近キハ溪水ノ淵ニ臨ム萬山寂トシテ聲ナク溪韻時ニ響アリ千樹杳トシテ靜ニ鶯吟偶々到ル左顧右眄未ダ奇ト呼ビ快ト叫ブノ暇ヲ得ズ

尾山ニ入谷アリ滿谷皆梅樹ニシテ遠キハ朦朧タリ近キハ歴々タリ眸ヲ放テハ盡ク一目ノ裡ニ萃マル第一ヲ初谷ト云ヒ第二ヲ鹿飛谷ト云フ第三ハ即チ祝谷是ナリ第四ヲ杉谷ト云ヒ第五ヲ搜窪谷ト云フ一小祠アリ之ヲ天神ノ森ト名ヅク地閑ニ境靜ニシテ風光亦凡ナラズ幽邃ニシテ自ラ仙袞ノ趣アリ其下ニ巨岩アリ天狗巖ト稱ス世俗ニ傳フ羽客ノ棲止セシ所ナリト第六ヲ大谷ト云ヒ第七ヲ菖蒲谷ト云ヒ第八ヲ一目千本谷ト云フ其ノ相距ルヲ數百歩ニ過ギズ而シテ其ノ勝各異レリ盡ク狀スベカラズ

山徑一轉シテ大谷ノ上ニ出デ代官坂ヲ下ル屈曲宛モ羊腸ノ如シ故ニ世俗ニ稱シテ九折ト云ノ坂ヲ下リテ其ノ所謂一目千本谷ニ到ル眺望ノ絶佳ナル殆ト一幅ノ大活畫ニ對スルガ如ク梅花爛漫トシテ濃淡相含ミ疎密相映シ高低相承ケ凸凹相應シ山色ノ依稀タル水光ノ搖曳セル一瞰一囑杳トシテ醉ヘルニ似タリ音ニ聞ク初音ノ澗ハ杜鵑ノ如ク雲ノ彼方ニノミ水聲ヲ漲ラシテ其ノ姿ヲ見セズ大谷菖蒲谷等皆横ニ走ルガ如キヲ見ル河ヲ隔テ、雲表ニ聳然タルハ藥師ガ岳ナリ溪ヲ貫キテ脚下ニ

鏘然タルハ五月川ナリ

五月川ハ南ヨリ來リ更ニ轉シテ西ニ向フ水色蒼々トシ宛ラ藍ヲ流セルガ如ク河中岩石多ク潺湲響アリ其ノ水流レテ初谷祝谷ノ下ヲ過グルヤ巒ヲ蔽ヘルノ花倒マニ影ヲ水上ニ灑ス水豊情ナカラムヤ急湍直下シ激浪巖ニ碎ケテ素車走リ白馬驅クルノ觀アリ花影之ガ爲ニ或ハ缺ケ或ハ全ク水花ヲ妬ムテ其ノ影ヲ乱ヤント欲スルニ似タリ

(以下略之)

吾聞ク此ノ地ノ梅樹其ノ實ヲ結ブヤ烏梅ヲ製シ之ヲ京都ノ染業店ニ送ル烏梅ハ染料ニシテ古來ノ紅染ハ大抵此ノ烏梅ヲ用キシナリ然ルニ維新以來染料總テ洋紅ヲ仰ギ此ノ烏梅ヲ用キズ是ヲ以テ烏梅ノ需用殆ト其ノ途ヲ失ヒ土人往々樹ヲ伐リテ薪炭トナシ山ヲ拓キテ茶園トナシ復舊時ノ觀ナク誠ニ到ル者ヲシテ勝地何レノ處ニカ在ル花神何ニ由テカ尋ネントノ嘆アラレム之ヲ愛フル有志ノ士明治十七八年頃ヨリ西ニ起リ東ニ應シ廣ク同志ヲ募リ維持ノ方策ヲ講シ尋テ月瀬保勝會ナルモノヲ設置シ土人ニ謀リ年々歳々増殖シ力ヲ極メテ培養解ラズ更ニ亭榭ヲ月瀬及ビ尾山ニ構ヘ今ヤ會員數千人

◎桃香野

上野停車場を下車し上野町を経て梅溪へ行かば又尾山に着す故に尾山は景色を見ざる者なきも月瀬の全景を見ざるもれあり月瀬の全景を見るも桃香野の勝を探らざるもの極めて多し抑桃香野は月瀬村の西端より尾山を距ることや、遠く行路少く困難なるも其風光の絶佳なる一たび足を此地に投せしめれば、忘るゝ能とざるどころにして月瀬尾山と比び賞すべく特よこの地の梅の樹古く花肥て最も美事なりやれば里人と桃香野を見ざるものと月瀬を見たりといふやとて稱ふとかや此地は龍王の瀧あり

左ニ紀行中ノ一節ヲ抄録ス

舟漸ク進ミテ桃香野ニ至ル山上山下鐵枝百出シ清香浮動シ眞ニ衆香國裡ニ入ルガ如ク其ノ山水ノ清奇ニシテ且ツ梅樹ノ多キコト月瀬ノ一目万本尾山ノ一目千本谷ト相擬抗スベキナリ吾聞ク茲ノ地ノ梅ハ維新以降島梅ノ需用減マタルモ幸ニ斧斤ノ災ヲ免レタリト其ノ樹ノ古ク其ノ花ノ肥エタル亦以テ知ル可キナリ〔以下略之〕

◎月瀬村

月瀬村之大字六あり即ち月瀬尾山、桃香野、長引石打これなり戸數五百五十、人口二千四百ありて大抵男は柚木を山に樵りて夕へは暮煙を帯びて家へ歸り女は麻布を庭に織りて且たに曉霧を伴ふて市へ出づ上野町にて焚く所の薪は多くこの村より供給し近國まで用ゆる所の布のこの村にて織りなしともれまた少からず

舊記に據るよこの地の元伊賀の治下なりしに昔時戦國の際豪強相奪ひ始めて大和に領地なりとも廣瀬、嵩の者は伊賀に屬せしに維新の際全く今の所轄に移り去り

◎植梅の目的

これ谷にとりて梅を植えしと今より幾歳以前あるや詳かならざるも天然の美景よきは一入の色香を添へて眺めばやどの目的よりあらで實を結ばせその熟するころ採りてこれを京都へ送るよめと世よはれを鳥梅で名づく京都にてと製して染汁でなす即ち京紅これあり當時毎年得る所の數量實に夥しくして(最近の調査に依れば年の豊凶に依り多少の差違あるも凡六七千石乃至一萬石)その收入また少のり

すこの地唯一の産物たりし ざるを維新以來外國の紅粉
 輸入し來り その價いひ廉ければ立派なる染物よあらざれ
 と この烏梅を用ひざるもる烏梅の需用次第に減するに至
 りたれり己むなく一時は樹を伐り山を拓きて勝地の景色を
 傷ひたるを心あるもの、慨く所なり維持の方法を立て保
 勝てふ會起されたり

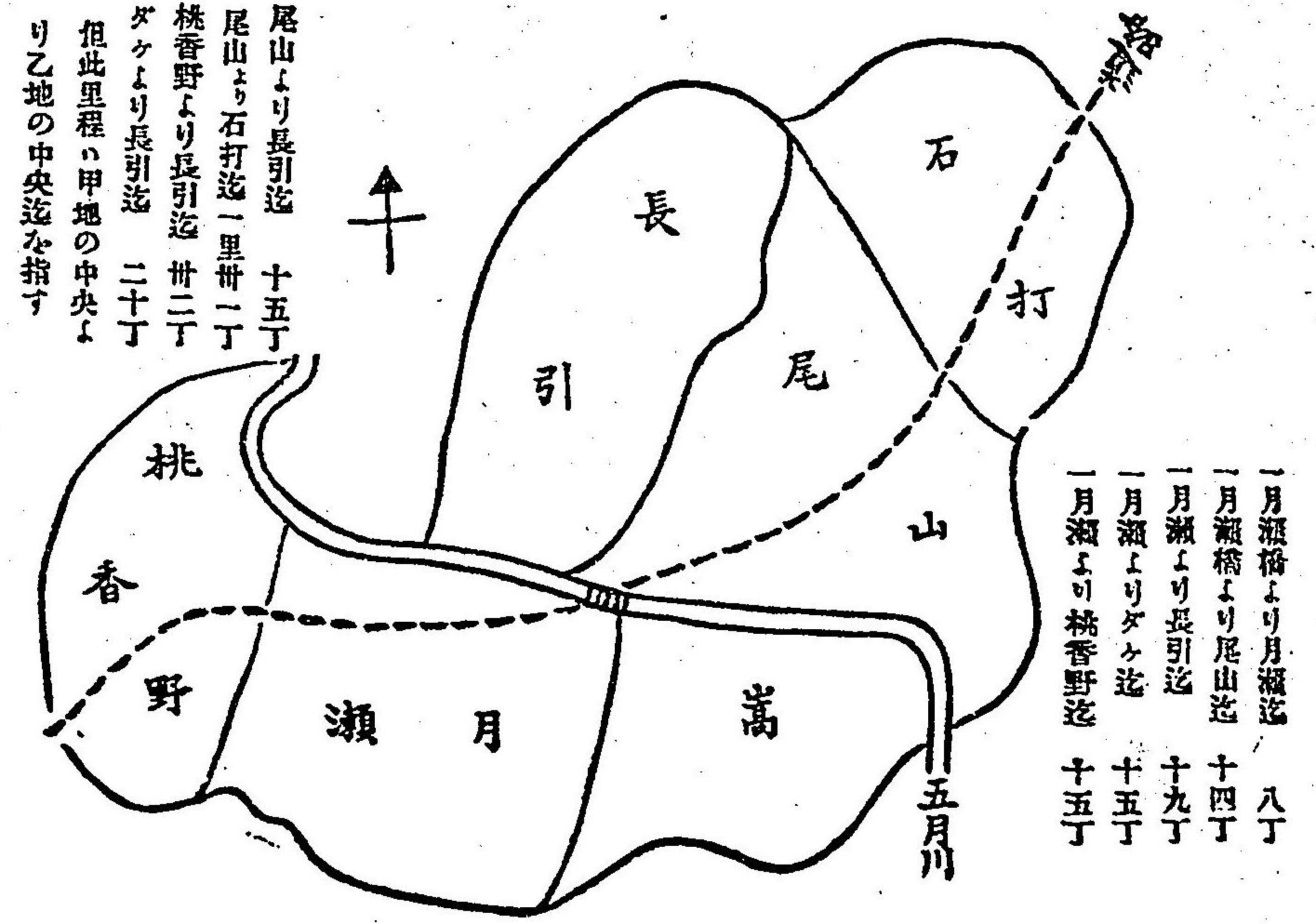
◎梅の木

その數凡三万株(最近の調査に依る)老たるものも若きもの
 りて種類また一様ならず されど老木は更なり若木よても
 大抵枝に苔を纏ひざるなきり この地の特色なり

◎梅溪の十六村

世よこの梅溪を指きて單に月瀬といひ今や月瀬の名獨
 り人口は膾炙す されど月瀬は速りて尾山 桃香野 嵩 瀬
 廣瀬 長引 石打 片平 吉田 高尾 田山 中峰山(以上大和ニ
 屬ス) 治田 白檉 子野(以上伊賀ニ屬ス)等みち梅花の觀る
 へきものあり これよ月瀬を併せて梅溪の十六村と名づく
 而きて月瀬尾山のその最と清絶なるものなり

月瀬村ノ圖



◎五月川又躑躅川に作る

源を大和の宇陀諸山より發去青蓮寺赤目四十八流(伊賀國名賀郡よある有名の勝地)の諸水を合せ月瀬尾山の麓を流る谷間、躑躅多し五月の頃崩れ落ちんとする崖の下水碧潭を穿して底に薄紅の雲を宿せるのさながら躑躅の水に化粧せるが如く、また一入の眺めなり、ゆゑに躑躅川又名づく下流は山城に入りて木津川となる

◎月瀬橋

五月川に架す木の橋にして橋桁と石積なり長を三百八十四尺巾十四尺あり明治二十六年七月に架けたるもの、從前と總て小舟を以て渡せり、この橋を尾山と月瀬との境界なる

◎月瀬保勝會

その名の示す如き主意にて設けられたるも、れなり上野町への事務所あり尾山に出張所あり

◎三亭樹

明治廿年月瀬保勝會の建設よかゝる一日千本谷よあるを玉界亭といひ初音は瀧よあるを聽泉亭といひ鶯谷よあるを聞禽亭といふ

◎月瀬の八景

月瀬橋 宮の笠 藥師ヶ岳 宮山 雙見山 一目萬本 奥の谷 雲景山をいふ

◎尾山の八谷

初谷 鹿飛谷 祝谷 杉谷 搜窪谷 大谷 菖蒲谷 一目千本谷をいふ

◎十六勝並よ其の位置及距離

尾山の八谷よ月瀬の八景を加へ、これを梅溪の十六勝と名づく

初谷は尾山の東南よあり

鹿飛谷は初谷の西北よあり、その相距ること凡五丁、その下に瀧あり、こきを鹿飛の瀧といふ

祝谷は鹿飛谷の西方よあり、それ相距ること凡二丁

杉谷は祝谷は北方にありその相距ること凡二丁半
 搜窪谷は杉谷の西南よりその相距ること凡二丁
 大谷の搜窪谷は西北よりその相距ること凡二丁
 菅蒲谷の大谷の西南にありその相距ること凡二丁半
 一目千本谷の菅蒲谷の西南にありその相距ること凡二丁半
 月瀬橋は一目千本谷の西南よりその相距ること凡二丁半
 宮の笠は月瀬橋の西南よりその相距ること凡二丁半
 薬師ヶ岳は宮の笠の南方にありそれ相距ること凡六丁半
 宮山の薬師ヶ岳の西方よりその相距ること凡八丁
 雙見山の宮山の西北よりその相距ること凡二丁
 一目萬本は雙見山の東よりその相距ること凡三丁
 奥の谷は一目萬本は西北よりその相距ること凡十三丁
 雲景山と奥の谷の西北にありそれ相距ること凡六丁

◎ 薬師ヶ岳

崗にあり月瀬橋より南より望む高さ山なり

◎ 代官坂

尾山の里をとなれ山は頂上より月瀬橋より出づる山坂にまで

登ながら羊は腸より似たり也るは九折なりいふ

◎ 天神の森

尾山に里をはなれ代官坂よりかゝる手前に路岐きて二つあり
 右に代官坂よきて左を下れの小やかなる祠ありこれを天神
 の森なりいふ

◎ 天狗巖

天神の森の下よりあり傳へいふ昔時天狗の棲みに去處なり

◎ 鶯谷

尾山開禽亭の邊をいふ即ち長引へ通ひ路の入口よきて其上
 より初音の瀧あり

◎ 奥の谷

桃香野にあり梅の多きところ一目千本より劣らじこの地より白
 髪の梅といふあり梅よきて桃の香を含めり桃香野の名或は
 これより因みたるよやこゝ奥の谷の渡あり

◎ 雲景山

桃香野もしかのあり月瀬つきのせより眺望てうぼう頗る佳し故ゆゑは薬師やくしヶ岳がたけと同じく月瀬八景中つきのせはつがいちゆうに加くはゆるも月瀬つきのせにあるよりあらす

◎ 芭蕉の碑

月瀬つきのせの里まにあり碑ひと自然石じぜんせきにして左ひだりの文字もじを刻きみあり

春もや、芭蕉翁

けしきと、れふ

月と梅

霞門謹言

◎ 旅館の部

月瀬つきのせは騎鶴樓きかくろう(窪田兵藏)香雲亭かうんてい(梅久)吟香館ぎんかうくわん(今岡利平)あり桃香野もしかのの雪中庵せつちゆうあん(奥西喜三郎)あり花はなに戯たわむれ水みづは飽あきてなほ月つきは景色けしきながめばなと思おもふもれ、投宿ていしゆくには誠まことに便利べんりなり

梅見うめみの往來ゆきより宿泊しゆくぱくに都合ごうごよきを上野町うののちやうとす上野町うののちやうより旅館りやうかん多おほきも就中なかにつき本町通ほんまちのうの友忠ともちゆう(曾我忠兵衛)花月はなづき(大谷俊義)布長ふぢやう(西澤長兵衛)八百新やっぺんしん(八尾巖)および赤阪町あかまがちやうの醉月樓すいげつろう(三谷清助)等らの最ももつとよろし若し人力車じんりくしやに乗のらんと思おもふもの

此こゝの旅館りやうかんの亭主ていしゆうは命いのちせよ旅館りやうかんにとたれ、召よし抱かかへの車夫くるまのりあれ、いざ、かも、不法ふぽうの賃ちやんを貪あまるゝが如ごとく心配しんぱいならん

◎ 土産物の部

月瀬つきのせより青梅漬あまめづ、熨斗梅おのすうめ、月瀬糖つきのせとう、山葵やまわし、梅うめの木細工きこさい等らあり上野町のちやうよりてこを求めんか菓子類かしるい最も手輕てかろにきてよろし、らんことよ本町通ほんまちのうり紅梅屋こうばいや(筒井小八郎)の煉羊羹はりやうかん、松茸砂まつたけさ糖漬桔梗園たうづけきやうえん(中村伊左衛門)の五香ごかうの色いろ、名所煎餅なしょせんぺい、三之町角築稲室かくづきいさだ(應喜伊七)の國くにの花はな、カステラー、松茸砂糖漬まつたけさとうづけ、西町角藏持屋まちかくぞくぢい(大西忠次郎)の松茸砂糖漬まつたけさとうづけ、金酸糖きんさんとう、愛宕町長權あたごまちながん(長崎權四郎)のながぎ、三等さんとうの風味ふうみなかく宜よろしけ、土産用みやげようより適當てきとうならん

月瀬案内終

伊賀國上野町大字中町

御定宿 西澤長兵衛

●月瀬觀梅小御來遊諸君の何卒
御來宿被成下度萬事一層注意
と加へ勉強仕候就ては人力車
差立御案内可申上候

月瀬保勝會員休泊所

御 伊賀上野中町
御 屋號 友生屋

旅料 曾我忠兵衛

館理

伊賀上野中町
友生屋支店

御菓子司 曾我和平堂

明治三十三年三月五日印刷

同 年 同 月十一日發行

同 年 同 月二十日二版發行

同 年 同 月二十三日三版印刷

定價金拾錢

三重縣阿山郡上野町大字西口前町
五拾番屋敷

著作者 木津龜郎

全縣全郡全町大字東町拾番屋敷

發行兼印刷者 吉岡善兵衛

版權
所有

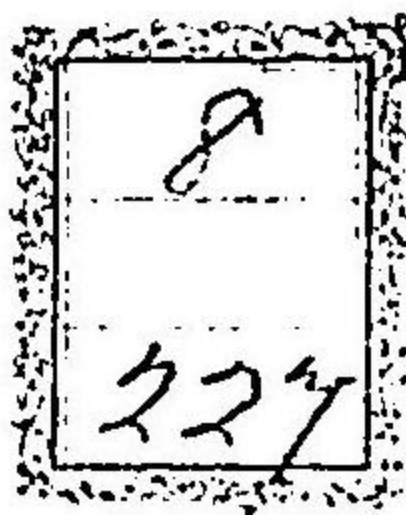
三重縣阿山郡上野町大字東町

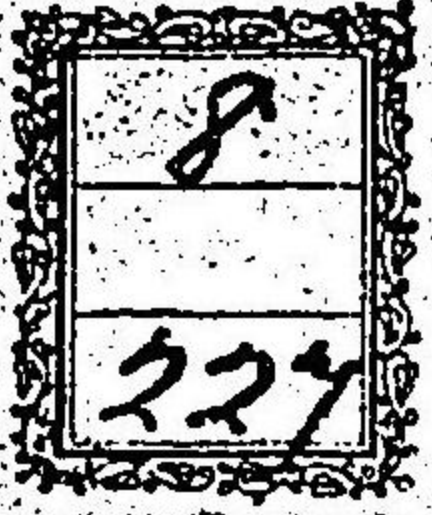
吉岡活版所

上野町

各書藉店

大賣捌所





大賣捌

三重縣阿山郡上野町大字東町
吉岡活版所
上野町
各書藉店



版權
所有

著者 木津龜郎

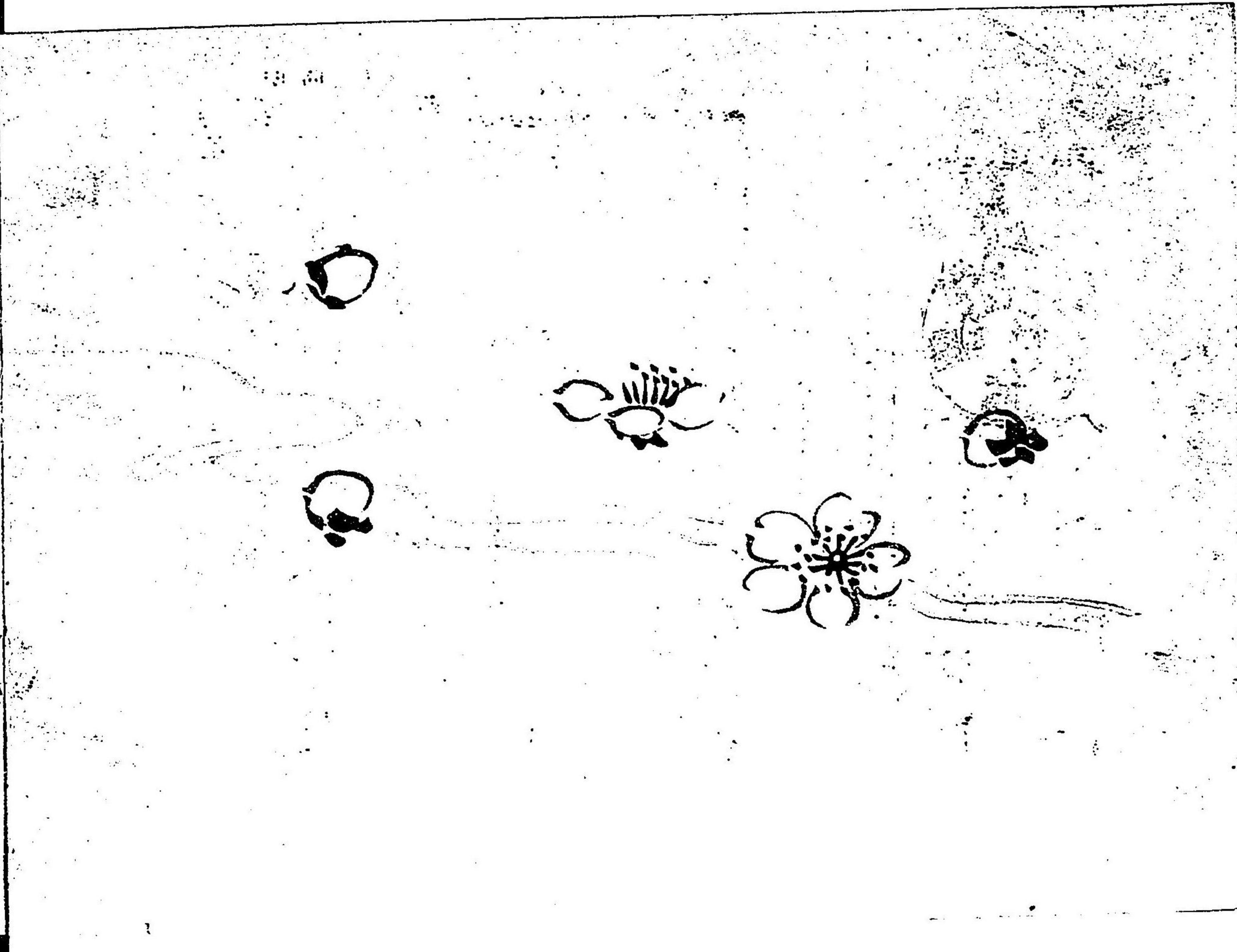
全縣全郡全町大字東町拾番屋敷

發行兼印刷者 吉岡善兵衛

三重縣阿山郡上野町大字西日南町
五拾番屋敷

明治三十二年三月五日印刷
同 年 同 月 十一日 發行
明治三十三年二月十三日二版印刷
同 年 同 月 二十日 二版發行
同 年 三 月 十一日 三版印刷
同 年 同 月 十七日 三版發行

定價 金拾錢



8
324

